

博士学位論文

ポストアパルトヘイト南アフリカにおける都市統治の民営化と社会的分離
——ヨハネスブルグのインナーシティ再生プロジェクトの事例から——

宮内 洋平

目次

序論

- 第1節 本論文の目的
- 第2節 調査地の概要
- 第3節 本論文の構成

第1章 新自由主義的統治性と構造的不正義

- 第1節 新自由主義と「社会的なもの」
- 第2節 資本主義と生権力
- 第3節 統治性の系譜学
- 第4節 フォーディズムを統治性から読む
- 第5節 構造的不正義と政治的責任

第2章 人種的フォーディズムから非人種的ポストフォーディズムへ

- 第1節 南アフリカの「産業革命」とヨハネスブルグ
- 第2節 アパルトヘイトと人種的フォーディズム
- 第3節 ポストアパルトヘイトとポストフォーディズム型統治性
- 第4節 グローバル時代の公共空間

第3章 「社会的なもの」の喪失と公共空間の抑圧

- 第1節 ポストアパルトヘイトの雇用・格差・貧困
- 第2節 サービス・デリバリーの政治学
- 第3節 公共財の私有化
- 第4節 ポストアパルトヘイト社会の治安
- 第5節 貧しきものは罰せよ
- 第6節 ポストアパルトヘイト社会の「客観的暴力」

第4章 安全コミュニティへの逃避

- 第1節 不確実な時代のコミュニティ統治
- 第2節 プライベート都市が築く「要塞」
- 第3節 新自由主義的コミュニティが生み出す過剰包摂

第5章 インナーシティのプライベート都市化

- 第1節 インナーシティの創造的破壊
- 第2節 インナーシティのスーパーブロック化（1970～1990年）
- 第3節 インナーシティの放棄（1990～2000年）
- 第4節 都市改良地区化によるインナーシティ再生（2000年～現在）

第6章 脱工業都市とクリエイティビティ

- 第1節 都市のグローバル競争

- 第2節 アート産業と新進黒人アーティスト
- 第3節 アートフェアとワールドクラス都市
- 第4節 ボヘミアンのノスタルジア
- 第5節 クリエイティブ都市改良地区
- 第7章 「光の都市」から見る構造的不正義
 - 第1節 「光の都市」の誕生
 - 第2節 「光の都市」の開発状況
 - 第3節 「光の都市」のジェントリフィケーション
 - 第4節 闇に浮かぶ「光の都市」
- 第8章 「闇の都市」の窮状
 - 第1節 「闇の都市」という常態
 - 第2節 「闇の都市」のスラム
 - 第3節 南アフリカのインフォーマル経済
 - 第4節 「闇の都市」の経済活動
 - 第5節 「報復都市」ヨハネスブルグ
 - 第6節 「闇の都市」のアジール
- 第9章 プライベート都市が目指す社会的包摂
 - 第1節 クリエイティブ・コミュニティから包摂的コミュニティへ
 - 第2節 Maboneng と起業家精神
 - 第3節 都市の公共空間をめぐって
 - 第4節 ポストアパルトヘイトのアイデンティティ政治
- 第10章 プライベート都市の社会学
 - 第1節 奇妙な Maboneng
 - 第2節 都市改良地区というアーキテクチャ
 - 第3節 「光の都市」のセキュリティ
 - 第4節 「光の都市」の包摂的管理
- 結論 正義への責任のために
 - 第1節 論点の整理
 - 第2節 「救済の物語」が生みだす社会的分離
 - 第3節 新自由主義的統治性が生みだす構造的不正義

要約

本論文の目的はポストアパルトヘイト南アフリカの社会的分離の実態と構造を、ヨハネスブルグのインナーシティ再開発にともなう都市統治の民営化に着目して明らかにすることである。新自由主義的グローバリゼーションが進展するなかで、世界の大都市では私企業、民間管理機構、市民などが主導する都市空間の私有化と都市統治の民営化（プライベート都市化）が広く見られるようになってきた。民主化後の南アフリカでも、プライベート都市化が進んでいるが、プライベート都市は貧困層や弱者を排除する新たなアパルトヘイトを生みだしていると批判されることが多い。これを受けてヨハネスブルグには「社会的包摂」を掲げて貧困問題に取り組み始めたプライベート都市がある。私的主体が「社会的なもの」に介入するという新しい包摂社会で生み出される社会的分離に注目する点が本論文の特徴である。

第1章では本論文の理論的枠組を示した。新自由主義と社会的なものの複雑な関係を認識するうえで、フーコーの「生権力」と「統治性」の概念は有益であり、フーコーを援用したナンシー・フレイザーによるフォーディズムとポストフォーディズムの統治性の議論は、現代社会を分析するうえで重要な示唆を与えてくれるものである。また、アイリス・マリオン・ヤングの「構造的不正義」の概念は、現代南アフリカ社会の根幹的問題に迫る上で、もっとも有効な概念の1つであると指摘できるだろう。

第2章では、第1章で提示した理論的枠組が、現代南アフリカ社会を論じる上でいかに有効であるかを具体的に示した。黒人を低賃金で動員することを可能としたアパルトヘイト政策は「人種的フォーディズム体制」と呼べるものであった。人種的フォーディズム体制の下で、白人は先進諸国民と同等の福祉を享受できた一方で、黒人は劣悪な生活環境に置かれ続けた。1980年代以降の景気低迷を受けて新自由主義路線を選択した南アフリカは、非合理的な人種的フォーディズム体制であるアパルトヘイトを撤廃した。ポストアパルトヘイト時代は「非人種的ポストフォーディズム体制」と呼べるものであるが、これは人種隔離ではなく、より複雑な排除と包摂の仕組みによって、社会的分離を促すこととなった。

第3章では現代南アフリカの社会問題を「社会的なもの」の喪失と公共空間の抑圧に着眼して整理した。ポストアパルトヘイト社会に蔓延する暴力、治安の悪化、失業、格差、貧困、行政サービスの停滞、公共財の私有化、官憲による弱者の暴力的な取り締まりの実態が、統計資料等から明らかとなった。アパルトヘイト時代から「社会的なもの」を十分に受領できていなかった人びとが、現在も引き続き苦しい立場に置かれているといえよう。

第4章では、社会に不安が蔓延するなか、人びとは公共領域の代替物としてコミュニティを希求していることを指摘した。リチャード・セネットはコミュニティとは社

会からの引きこもりであり、都市のなかのバリケードであると主張する。また、ニコラス・ローズによれば、新自由主義時代においてコミュニティは統治権力によって道具として動員され、「遠隔統治」による社会的マネジメントに利用されるものである。こうした指摘のとおり、南アフリカで中間富裕層が安心感を得るために作り出しているコミュニティは、周囲をフェンスで張り巡らせた「ゲートッド・コミュニティ」や、監視カメラや警備員によって管理された「都市改良地区」であり、「アフリカ化」してゆくヨハネスブルグのなかに例外空間を作り出し、資本投下と自己統治を行うプライベート都市となった。結果的に、コミュニティに属することができる者と、排除される者を生み出していると考えられる。

第5章では、長らく投資が停滞していたヨハネスブルグのインナーシティに対する近年の投資回帰に注目した。インナーシティの変遷は、1970年代～1990年の巨大オフィス・ブロックが生まれたインナーシティ再編期、1990年～2000年の投資撤退と企業の郊外移転および白人流出とアフリカ人流入の時期、2000年から現在に至るインナーシティ復興期の三期に分類可能である。2000年代からのインナーシティ再生の機運と近年の投資回帰は、「都市改良地区」と呼ばれる手法に則ったプライベート都市化によって実現されており、インナーシティの大半の地区が民営化された。ヨハネスブルグ市はグローバル都市競争に打ち勝つためにインナーシティのプライベート都市化を推進しているが、浄化作戦によって路上商人の強制排除などが生じており問題となっている。

第6章では、脱工業化社会における都市間競争とクリエイティブ産業の関係に注目した。近年、クリエイティブ・クラスによるクリエイティブ都市づくりが新たな経済成長戦略として脚光を浴びているが、映像産業、IT産業、アート産業が盛んなヨハネスブルグ市もクリエイティブ産業を促進している。都市とアート産業が連携して、ポストアパルトヘイト社会の負の印象を打開すべく、アートフェアやアートフェスティバルの開催が盛んになってきた。南アフリカのみならずアフリカ諸国から集まった新進黒人アーティストの活躍も目立ち始めており、彼らはポストアパルトヘイト社会やアフリカの苦悩を主題とする作品を生み出している。インナーシティではアート主導都市再生が始まっており、これらは都市改良地区の手法を用いたクリエイティブ都市改良地区となっている。だが、このようなプライベート都市が創造性溢れる空間を生み出せるかは未知数である。

第7章では、2009年に始まったヨハネスブルグのインナーシティの旧軽工業地区の再開発プロジェクト、Mabonengに注目した。一私企業の手による都市再生事業は、ヨハネスブルグの都市再生の成功モデルとして脚光を浴びている。デザイン性に富んだ建築とクリエイターたちが生み出す物語、そして堅牢なセキュリティによって、これまでインナーシティを忌避していた郊外住民が頻繁に訪れたり、移住したりする地区

となった。だが同時に、この再開発が既存住民や周辺住民を追い出すジェントリフィケーションを引き起こしていると批判されている。Maboneng開発をめぐる諸問題は、開発企業が合法的かつ倫理的な活動をしているにも関わらず生じてしまうものである。したがって、一企業を批判すれば問題が解決するものではなく、ヨハネスブルグが都市全体として引き起こしている構造的不正義を直視し、この解消を目指す必要があるだろう。

第8章では、Mabonengを取り囲むように存在する周辺コミュニティの住民の住環境と経済活動に焦点を当てた。周辺コミュニティに暮らす人びとの多くがアフリカ諸国からの移民であり、路上商人や自動車修理工、廃品回収人といったインフォーマル経済に従事し、スラムビルやホテルで生活している。彼らの生は不確実性を帯びており、構造的不正義が招く負の要素を全て引き受けていると考えられる。都市再生が進むなか、彼らの居場所はますます脅かされている。これがヨハネスブルグのインナーシティの常態であることを受け止める必要がある。

第9章では、Mabonengプロジェクトが、クリエイティブ・クラスのためのコミュニティから、社会的包摂を掲げて隣接地区の貧困住民の生に配慮した「包摂的コミュニティ」づくりに移行していく様子を見た。Mabonengは包摂的コミュニティづくりに貢献する社会起業家、NGO/NPO主宰者、アーティスト、建築家、市民などを集めている。彼らの語りと実践を分析することで、新たな都市空間における権力の交錯が明らかとなった。彼らの活動は可能性を帯びているが、限界があると言わざるを得ない。

第10章では、「包摂的コミュニティ」づくりが、人びとに得も言われぬ違和感を引き起こしている様子を見た。Mabonengプロジェクトはこの街を「啓蒙されたコミュニティ」として認識している。Mabonengで活動する人びとは「奇妙なMaboneng」という語りをする。この違和感の要因は、都市改良地区という手法により自己統治し、厳格なセキュリティによって歓迎すべき客と招かれざる客を峻別し、グラフィティを管理し、人道主義的な介入によって画一的な生を推進する、プライベート都市の社会工学によるものであると考えられる。

本論文は、社会的包摂を掲げて「救済の物語」を展開しているプライベート都市の生権力は、結果として社会的分離を生み出してしまうと結論づけた。私的主体による社会的なものへの介入が成功モデルとされ、国家や都市政府が社会保障から撤退すれば、誰もが存在しているだけで社会保障を受けられる「権利」は失われ、「施し」を受ける存在として社会的包摂プロジェクトに組み込まれることになる。よって、ロベール・カステルのいう「排除の罠」に陥って、弱者は永遠にその立場から抜け出すことができなくなってしまうだろう。われわれは、構造的不正義の解消のために、この構造に関与する誰もが、分有されるべき政治的責任を有するのである。